

令和 6 年 6 月 16 日現在

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K02462

研究課題名（和文）アメリカにおける愛国心を形成する学校行事・儀式の普及とダイバーシティ教育の起源

研究課題名（英文）The Spread of School Events and Ceremonies of Patriotism and the Origins of Diversity Education in America

研究代表者

佐藤 隆之（SATO, Takayuki）

早稲田大学・教育・総合科学学術院・教授

研究者番号：60288032

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,100,000円

研究成果の概要（和文）：学校行事・儀式について、公立学校で国旗掲揚の儀式が始まり、普及する過程をたどった。忠誠宣言儀式の強制は、市民の多様性が否定された時代を象徴していることを明らかにした。ひとつの事例として、ニューヨーク市にある進歩主義学校であり、デューイの影響を受けたホーレスマン・スクールでの実践を取り上げて、国旗掲揚や忠誠宣言の儀式を取り入れたプロジェクト学習を分析した。アメリカ化とプロジェクト学習を交差させて構成されたものであったことがわかった。愛国心教育としてジョセフ・リー、多様性を重視する教育としてジョン・デューイを取り上げ、それぞれの思想とそれに基づく実践について検討し、共通点と相違点を解明した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

アメリカ革新主義期の市民性をめぐる議論やその成果を、総合的に解明した。その当時には、アメリカ例外論（アメリカはつねに道徳的に正しいという理念）に基づく排他的な立場と、アメリカ民主主義の意味を国外にまで広げてとらえ、移民や異文化に寛容な立場が拮抗していた。この二つは別々に論じられることが多く、全体像の包括的な分析が不十分であった。研究代表者と研究分担者でそれぞれを担当してその成果を統合するという手法をとることで全容を解明し、これまでの研究を前進させた。それにより、近年注目されている市民性教育や民主主義教育論に理論的な基礎を提供した。

研究成果の概要（英文）：We traced the process of the initiation and spread of flag-raising ceremonies in public schools regarding school events and ceremonies. We revealed that the enforcement of the Pledge of Allegiance ceremony symbolized an era when the diversity of citizens was denied. Additionally, an analysis was conducted on project-based learning that incorporated flag-raising and pledge of allegiance ceremonies at the Horace Mann School, one of the progressive schools in New York City influenced by Dewey. The school discussed the implementation of classes that incorporated Americanization and projects. This study also features Joseph Lee in the context of patriotic education and John Dewey in the context of education that emphasizes diversity. An examination of their respective philosophies has led to the clarification of both commonalities and differences.

研究分野：教育思想、教育史

キーワード：ダイバーシティ（多様性） 愛国心 ジョセフ・リー ジョン・デューイ よい市民（性） 市民性教育 国旗掲揚 忠誠宣誓

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

近年、欧米においては、自己や自国の利益を優先する保守的な傾向が強まるなか、多様性を担保しながら共通性を維持し、自国と他国、自己と他者を相互に尊重し、発展することができる民主主義とその教育のあり方が問い直されている。この自国第一主義とそれに対抗する民主主義教育の問題は今に始まるわけではない。19世紀末頃から20世紀の初頭にかけてアメリカでは、未曾有の社会変動を背景として、愛国心を養う行事や儀式が広く実施された。

こうした学校行事・儀式については、愛国心を醸成してナショナリズムを浸透させ、国民形成を支えたことが明らかにされてきた。学校行事・儀式は、アメリカの学校における民主主義の教育を検証し、今後の方向性を展望するための格好の対象であった。実際、『共通の土台を求めて多様な社会における公立学校(Seeking Common Ground: Public Schools in a Diverse Society)』(2003年)は、アメリカ教育史を、ダイバーシティ(多様性)を尊重しながら、民主主義を確固たるものとするコモン・グッドを探究する葛藤の歴史として描き出している。今日、障がいやLGBTなどの性的マイノリティの教育までを広く包括するようになったダイバーシティの起源や意味が、「忠誠の誓い」や国旗掲揚などの学校行事・儀式にもふれながら考察されている。それにより、民主主義を成り立たせる共通の土台を学校教育でどう構築するかが探求されている。

## 2. 研究の目的

本研究は、アメリカにおいて19世紀末頃から公教育制度の確立とともに普及した学校行事・儀式を通しての愛国心(patriotism)教育の理念と実際について、実証的かつ思想的に検討することにより、学校教育におけるナショナリズムとデモクラシー理念の葛藤の実態と特質を解明することを目的とする。現代のアメリカでは、自国第一主義や排外主義が顕著になっているが、人種、民族、階級、宗教、さらには性別、障がいなどの相違を受け入れつつ、集団の凝縮性を維持・発展させることはアメリカ民主主義の伝統である。したがって、排外主義が強まるのに対抗して、自国と他国、自己と他者を等しく尊重し、互恵的な関係を築ける人間の育成をめざすダイバーシティ(多様性)教育を進めることも課題として提起されている。本研究では、公立学校における学校行事・儀式を通して、共通理念としてのアメリカ国民がどのように形成されたかを実証的に検討する。同時に、創られたアメリカ国民の特質と、ダイバーシティ教育の起源を解明し、今求められる民主主義の教育に対する示唆を得る。

## 3. 研究の方法

次の三点から考察する。

(1)20世紀初頭から半ば頃にかけてアメリカでは、学校行事・儀式がどのようにして行われ、普及したのか。

(2)そこにおいては愛国心をどのように理解し、いかにして形成しようとしたのか。

(3)愛国心形成において、ナショナリズムを基調とするアメリカ化は、個々のコミュニティや子どもの多様性を尊重する民主主義の形成といかなる関係にあったのか。

## 4. 研究成果

まず学校行事・儀式については、公立学校で国旗掲揚の儀式が始まり、普及する過程をたどった。アメリカは、南北戦争を経験し、憲法修正をし、アメリカで生まれたすべての人間に市民権が付与されることになった。いわば、このときに形式的ながら、ようやく国民として意識が明確になったとみることができる。19世紀末には、国旗は国家統合の象徴となり、公立学校でも、大統領の肖像画が掲げられ、国旗掲揚と国旗への忠誠宣言の儀式が行われるようになった。その影響については次の二点を指摘した。ひとつは、生徒を儀式に駆り出すことをとおして、生徒に愛国心を喚起したこと、もうひとつは、国旗への忠誠をしない人々を排除する根拠になったことである。忠誠宣言儀式の強制は、市民の多様性が否定された時代を象徴している。

また、ニューヨーク市にある進歩主義学校のひとつであり、デューイの影響を受けたホーレスマン・スクールにおける、国旗掲揚や忠誠宣言の儀式を取り入れたプロジェクト学習を分析した。市民性の育成を目的とするプロジェクトである「市民性プロジェクト」のひとつである、帰化プロジェクトを取り上げた。帰化プロジェクトとは、あるイタリア人が帰化を支援するためになにができるかを、生徒が中心となって探究するプロジェクトであった。最終的には、忠誠心とはなにか、それに対して果たすべき責任とはなにかを考え出すことをめざした。同校があったマンハ

ットンというコミュニティを生かし、帰化に関する法規や手続きに関する知識を学習できるようにしていた。それはアメリカ化とプロジェクトを交差させて構成された授業であった。

愛国心教育については、遊び場協会の会長を務め、リクリエーション活動を重視したジョセフ・リーを取り上げた。リーは、19世紀末にボストンの慈善家として活動を始めた。「慈善」の内容を考えるなかでリーが見出したのは、「アメリカ的精神」の重要性であった。理想的な慈善は、「金持ちが貧しい人のために働くのではなく、市民が市民のために働く」ことであった。リーは、ひとりひとりの精神の発達段階に着目し、リクリエーションによって本能を解放すれば、家庭、学校、国家への忠誠心が形成され、「アメリカ的精神」をもつ「よい市民」、すなわち「愛国者」が形成されると考えた。「アメリカ的精神」は愛国心と不可分の関係にあった。そのことは、同時に、「アメリカ精神」を受け入れない人々を排除することにもつながった。実際に、彼は移民制限運動の最も強硬な主張者のひとりであったことを明らかにした。

ダイバーシティ（多様性）教育の事例としては、ジョン・デューイに注目した。『民主主義と教育』においてデューイは、ひとりひとりが尊重され、なおかつ社会が進歩していけるような市民のあり方を追求している。それにより、多様性を重視しながら、統一性を保つ原理を提起している。その原理は次の二点からなる。ひとつは、「異なる人々に対して人生が与えることのできる、よさの多様性(diversity of goods)の積極的な承認」である。いまひとつは、「ひとりひとりが自分自身の選択を賢明なものにできるように奨励する、社会的有用性(social utility)への信頼」である。

「よさの多様性」は、なにをもって「よい(good)」とするかの価値観における相違を承認するということである。基本的には、「異なる人々」ひとりひとりの個人に焦点が当てられている。と同時に、そのような承認が人々に共有されるべきとする点においては、全体にも目が向けられている。

「社会的有用性」は、社会全体の方に目を向けている。「ひとりひとりが自分自身の選択」において社会に貢献することは認めているが、重点がおかれているのは社会への貢献、別のデューイの言葉を借りれば「社会奉仕」である。社会に秩序をもたらす統一性の要となるのが「社会的有用性」であるといつてよい。

このようにデューイが説く多様性の教育は、「よさの多様性」において個々の相違を承認し、「社会的有用性」(あるいは社会奉仕)によってコミュニティに統一をもたらすという原理に基づいている。そこに愛国心を形成する教育とも結びついた、多様性を尊重する教育の起源を見出した。

以上に加えて、本研究では、愛国心を形成する教育とダイバーシティ教育について、リーとデューイの「よい市民」を比較することで、以下のような、共通点と相違点を明らかにした。

まず相違点としては、愛国心を重視するリーは、人間の本能を解放することが、「よい市民」に直結すると考えていた。それに対してデューイは、子どもの身体を教育の原理としつつ、個々の知性や思考を重視した。また、リーが移民排除とアメリカ化を積極的に推進したのに対して、デューイはそれには非常に慎重であった。さらにいうと、リーが市民の「よさ」を国内に閉じて「よいアメリカ市民」を論じ、それを世界市民のモデルとしたのに対して、デューイは科学の発達に伴う交通・通信の普及改革に注目し、国境を超えた「よさ」を追求しようとした。

リーとデューイは、学校の教育を学校外にまで広げ、社会と関係づけて論じた点では、ねらいは共通していた。リーは、学校をリクリエーション活動や奉仕活動の一拠点として位置づけてはいたものの、学校に大きな期待を寄せず、遊び場協会のような社会組織において市民を育成しようとした。それに対してデューイは、教育には制度的側面(意図的・計画的側面)と非制度的

側面（付随的・偶発的側面）があり、後者は学校だけでは十分に実現しえないとして、それを補う意味でも、学校をコミュニティと結びつけることを説き、「社会センターとしての学校」を主張したのである。デューイの学校像は、リーの描く学校像と重なるところもあったのである。

このように愛国心を重視する立場と、多様性を重視する立場は、それぞれ独立した主張でありながらも相互に影響を及ぼし、ときに重なりあっていることを明らかにした。その意義としては、アメリカ革新主義期の市民性をめぐる議論やその成果を、両面から解明したことがあげられる。その当時には、アメリカ例外論（アメリカはつねに道徳的に正しいという理念）に基づく排他的な立場と、アメリカ民主主義の意味を国外にまで広げてとらえ、移民や異文化に寛容な立場が拮抗していた。この二つは別々に論じられることが多く、全体像の包括的な分析が不十分であった。研究代表者と研究分担者でそれぞれを担当し、その成果を統合するという手法をとることで全容を解明し、これまでの研究を前進させた。それにより、近年注目されている市民性教育や民主主義教育論に理論的な基礎を提供した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計7件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 5件）

1. 著者名 宮本健市郎	4. 巻 15
2. 論文標題 アメリカにおける自然保護運動の起源と新教育運動 自然と子どもの関係史に関する予備的考察	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 教育学論究	6. 最初と最後の頁 105 ~ 114
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤隆之	4. 巻 70
2. 論文標題 市民性プロジェクトの授業とアメリカ化 帰化プロジェクトにおける忠誠宣誓の再解釈	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 早稲田大学教育・総合科学学術院『学術研究 人文科学・社会科学編 』	6. 最初と最後の頁 101 - 124
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 宮本健市郎	4. 巻 13
2. 論文標題 アメリカ公立学校における国旗掲揚運動の起源と機能転換 統合から排除へ	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『教育学論究』（関西学院大学教育学会）	6. 最初と最後の頁 143 - 162
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤隆之	4. 巻 69
2. 論文標題 市民性プロジェクトによるアメリカ化と多様性の教育 忠誠に関わる儀式・行事に注目して	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 早稲田大学教育・総合科学学術院『学術研究 人文科学・社会科学編 』	6. 最初と最後の頁 119 - 137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 佐藤隆之	4. 巻 30
2. 論文標題 進歩主義学校における「良きアメリカ市民」の育成	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アメリカ教育研究	6. 最初と最後の頁 12-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本健市郎	4. 巻 30
2. 論文標題 アメリカ・ナショナリズムの展開と「よい市民」の形成	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 アメリカ教育研究	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 宮本健市郎	4. 巻 11
2. 論文標題 革新主義時代における社会センター運動の興隆と衰退 校舎開放と参加民主主義の実験	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『教育学論究』（関西学院大学教育学会）	6. 最初と最後の頁 143-154
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 1件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 佐藤隆之
2. 発表標題 新教育のなかの探究と「他者」 プロジェクトの実践と課題（日本教育学会第82回大会 課題研究：探究のなかで「他者」と出会う）
3. 学会等名 日本教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 宮本健市郎
2. 発表標題 環境教育の起源としての自然学習（アメリカ教育学会第 35 回大会 公開シンポジウム アメリカにおける環境教育の歴史と現状と課題：学校教育に何ができるか）
3. 学会等名 アメリカ教育学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 佐藤隆之
2. 発表標題 デューイのソーシャルセンターとしての学校とwelfare
3. 学会等名 日本デューイ学会第65回研究大会公開シンポジウム（招待講演）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮本健市郎
2. 発表標題 アメリカの公立学校における国旗掲揚儀式と忠誠宣言の始まり
3. 学会等名 教育と時間研究会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 K. Miyamoto, A. Adachi, A. Kobayashi, A. Suzuki, A. Shimbo
2. 発表標題 Japanese Trends in History of Education
3. 学会等名 International Standing Conference for the History of Education, 43rd Conference
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 宮本健市郎
2. 発表標題 アメリカ公立学校における国旗掲揚儀式の起源と機能転換
3. 学会等名 アメリカ教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮本健市郎
2. 発表標題 アメリカの公立学校における国旗掲揚儀式の普及とダイバーシティ教育の起源
3. 学会等名 関西学院大学教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 宮本健市郎
2. 発表標題 革新主義時代における「よきアメリカ市民」の形成
3. 学会等名 関西学院大学教育学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Takayuki Sato
2. 発表標題 Revisiting the History of New Education from the viewpoint of Gender and Transnational Perspectives(Symposium: Gender and Transnational Perspectives in the History of Education)
3. 学会等名 World Education Research Association Focal Meeting (国際学会)
4. 発表年 2019年



〔図書〕 計1件

1. 著者名 佐藤隆之ほか	4. 発行年 2024年
2. 出版社 丸善出版	5. 総ページ数 666
3. 書名 教育哲学事典	

〔産業財産権〕

〔その他〕

早稲田大学研究者データベース <a href="http://researchers.waseda.jp/profile/ja.59e0b90a579ea8ded466b7ab7f56107e.html">http://researchers.waseda.jp/profile/ja.59e0b90a579ea8ded466b7ab7f56107e.html</a>
---

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	宮本 健市郎  (Miyamoto Kenichirou)  (50229887)	関西学院大学・教育学部・教授    (34504)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------